＜学会レポート＞

第32回日本生命倫理学会年次大会

丸山　英二（神戸大学）

第32回日本生命倫理学会年次大会は2020年12月５日（土）～20日（日）にオンラインで開催された。本大会は当初、静岡県総合コンベンション施設プラサヴェルデ（静岡県沼津市）において開催の予定であったが、新型コロナウイルス蔓延を受けて、オンライン開催に変更されたものであった。開催に当たっては大会長の松田純教授（静岡大学）、実行委員会の堂囿俊彦委員長（静岡大学）、情報委員会の中澤栄輔委員長（東京大学）をはじめ多数の方々の尽力を得た。本大会では、シンポジウムやワークショップなどはZoomウェビナーを用いたリアルタイム接続とオンデマンド受信、一般演題はオンデマンド受信による参加となり、オンデマンド配信は12月20日まで継続された。また、通常、研究大会２日目昼休憩後に開催される総会について、今回はウェビナーで行われた。以下、筆者が参加することのできたセッションを中心に本大会の内容を紹介する。

大会は５日午前９時30分から松田大会長による開会式と大会長講演「価値観と文化の多様性にむきあう生命倫理学」で始まった。その後、三つのトラックでシンポジウム・ワークショップが開催され、筆者は公募シンポジウムⅢ「医療系倫理委員会の現在（いま）」に参加した。同シンポジウムでは、オーガナイザーの旗手俊彦教授（札幌医科大学）から企画の趣旨が説明された後、「人を対象とする医薬学系研究に対する倫理審査委員会のあり方」（野崎亜紀子・京都薬科大学）、「臨床倫理委員会の構成と機能」（丸山）、「倫理審査の質の確保と委員会事務局の役割」（横野恵・早稲田大学）が報告された。そのあとの討論において、2021年に制定予定の「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」において多機関共同研究の倫理審査に関し一括審査が原則とされることがもたらす影響、AMED事業による倫理委員会事務局員のためのCReP（Certified Research Ethics Committee Professionals、倫理審査専門職）という資格認定制度、ライブデモによる教育・研修などについて活発な議論がなされた。

第１日午後および第２日も３トラックでシンポジウムなどが並行して開催された。２日目の最初のセッションで筆者は公募シンポジウムⅥ「臨床倫理委員会のあり方を探る」（オーガナイザー：瀧本禎之・東京大学、長尾式子・北里大学）に参加した。「東海大学医学部付属病院倫理委員会の概要と臨床倫理委員会をめぐる今後の課題」（竹下啓・東海大学医学部）、「東京慈恵会医科大学柏病院臨床倫理委員会・コンサルテーションチームの活動について」（三浦靖彦・東京慈恵会医科大学）、「当院での活動の紹介と臨床倫理支援のあり方について」（金田浩由紀・関西医科大学）の各報告に共通して、臨床倫理委員会は倫理コンサルテーションとの関係が強いことが示された。

２日目最後のセッションで筆者は公募シンポジウムⅩ「診療記録における遺伝情報の管理は、遺伝子例外主義を乗り越えるべきか」（オーガナイザー：竹下啓）に参加した。「診療記録におけ

る遺伝情報管理の実態調査」（鈴木みづほ・東海大学医学部）における、遺伝情報を通常の電子カルテではなく紙カルテなど別の記録に収める取扱いが現在でも半数あまりの医療機関で行われているとの指摘は興味深かった。

オンデマンド配信された一般演題は25ほどあったが、そのうち9報告が若手優秀賞の審査対象となった。新旧の理事、評議員、監事による審査の結果、秋葉峻介（山梨大学／立命館大学）「治療の差し控え・中止における『自己への配慮』と関係的自律」および磯野萌子（大阪大学）「Rare Disease患者はどのように診断に辿り着くのか－HAE当事者の経験に関する質的研究から」（【共同演者】小門穂（神戸薬科大学）、加藤和人（大阪大学））の両名が本賞を受賞された。それ以外にも、「医学分野のオープンサイエンスのためのインフォームド・コンセントについての試論」（有澤和代＝神里彩子・東京大学医科学研究所）などの優れた報告が見うけられた。

オンラインによる開催となった本大会を振り返ると、シンポジウム等に関して発表を聞くことや質疑応答の点ではZoomウェビナーで十分対応できたように思える（システムダウンが何回かあったが、ほどなく復旧した）。それらはリアルタイム配信の後も（オンデマンド配信のみであった個別報告とともに）12月20日までオンデマンドで視聴できた。おかげで、オンサイトでは重複して聞くことができない複数トラックで同時に開かれるセッションを視聴したり、同じ報告を繰り返し視聴したりすることができた。このように見てくると学会のオンライン開催はオンサイト開催より機能的に優れていると考えることもできる。直接声を交わして旧交を温めることやいろいろな施設を訪問することはできないが、これらについても工夫すればオンライン懇親会のように疑似体験を得る方法はありそうに思える。新型コロナウイルス蔓延が終息するときが訪れた後も、オンライン学会・研究会がオンサイトでの学会・研究会と並ぶ選択肢として活用されることが期待される。

最後に、困難な状況下においてZoomウェビナーやオンデマンド配信を用い実り多い大会をご用意下さった松田大会長、堂囿実行委員長その他多数のスタッフの方々に改めて感謝して本稿を閉じたいと思う。